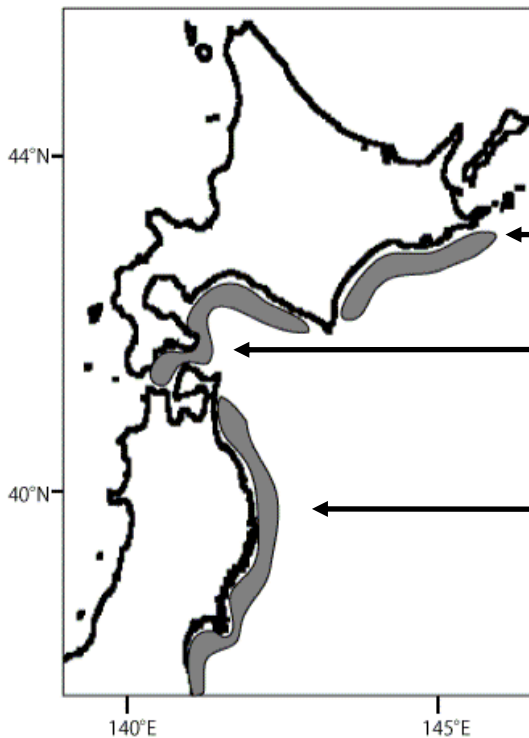


平成26年度 第1回 太平洋スルメイカ長期漁況予報

－ 別表の水産関係機関が検討し独立行政法人水産総合研究センター
北海道区水産研究所がとりまとめた結果 －

今後の見通し(平成26年7月～9月)のポイント

常磐～道東太平洋の北部太平洋海域におけるスルメイカの
来遊量は全体としては前年並み。



道東太平洋海域：
来遊量は前年並み。
魚体は前年並み。

津軽海峡～道南太平洋海域：
来遊量は前年並み。
魚体は前年より大きい。

常磐～三陸海域：
来遊量は前年並み。
魚体は前年より大きい。

問い合わせ先

水産庁 増殖推進部 漁場資源課

担当：沿岸資源班 梶脇、影沼澤

電話：03-3502-8111(内線6800)、直通電話：03-6744-2377、ファックス：03-3592-0759

当資料のホームページ掲載先URL

<http://www.jfa.maff.go.jp/j/press/>

(予報の詳細についてのお問い合わせ先)

独立行政法人水産総合研究センター 北海道区水産研究所 業務推進部

担当：塚本、大迫

電話：011-822-2131、ファックス：011-822-3342

当資料のホームページ掲載先URL

<http://abchan.job.affrc.go.jp/>

<http://hnf.fra.affrc.go.jp/>

平成 26 年度 第 1 回 太平洋スルメイカ長期漁況予報

今後の見通し（2014年7月～9月）

対象魚種：スルメイカ

対象海域：常磐～三陸海域、津軽海峡～道南太平洋海域、道東太平洋海域。

対象漁業：いか釣り、底びき網、定置網、まき網。

対象魚群：冬季発生系群（2014年級群）。

1. 常磐～三陸海域（いか釣り、底びき網、定置網、まき網）

- (1) 来遊量：前年並み。
- (2) 漁期・漁場：対象期間を通じて漁場となる。
- (3) 魚体：前年より大きい。

2. 津軽海峡～道南太平洋海域（いか釣り、定置網）

- (1) 来遊量：前年並み。
- (2) 漁期・漁場：対象期間を通じて漁場となる。
- (3) 魚体：前年より大きい。

3. 道東太平洋海域（いか釣り、底びき網）

- (1) 来遊量：前年並み。
- (2) 漁期・漁場：主漁期は前年より遅い。
- (3) 魚体：前年並み。

今後の見通し及び漁況の経過（2014年5月～6月）の説明

（1）今後の見通し

2014年6月までの漁況の経過、5月下旬～6月上旬に実施された新規加入量調査の結果、6月上旬～6月下旬に実施された漁場一斉調査の結果を主要な情報として、本予報対象期間である7月～9月における来遊量を予測すると、7月上旬現在で、太平洋の各海域に来遊しているスルメイカは、一部の海域で来遊の遅れが見られ、太平洋漁場一斉調査の調査海域全体の平均CPUEと日本海漁場一斉調査の津軽海峡西口の平均CPUEは前年を上回る水準であったものの、本予報期間の中盤以降に加入すると考えられる後続群は、新規加入量調査の結果から前年を下回る水準と予測されたことから、常磐～道東太平洋の北部太平洋海域における7月～9月の来遊量は概ね前年並みと予測される。各海域における今後の見通しは下記の通りである。

・常磐～三陸海域での漁獲対象資源は太平洋沿岸域を北上する群を主体として、津軽海峡から回遊する日本海由来の群が含まれると考えられる。三陸周辺海域（41°N以南、143°E以西）における漁場一斉調査でのCPUE（いか釣り機1台1時間当たり漁獲尾数）は前年並みであったことから、太平洋沿岸域を北上する群の来遊量は前年並みと予測される。一方、津軽海峡からの来遊量は、前年を上回ると予測される（後述）。当海域における6月までの漁獲状況をみると前年を下回る所が多く、親潮による冷水の影響を受け、来遊が遅れたと推測される。今後水温の上昇とともに漁場に参加する太平洋沿岸北上群の水準は前年並みと考えられることから、常磐～三陸海域への来遊量は前年並みと予測される。魚体サイズは、漁場一斉調査の測定結果から、前年（モード、8月18cm～19cm）より大型の個体が主体になると考えられる。

・津軽海峡～道南太平洋海域での漁獲対象資源は、太平洋沿岸を北上する群と津軽海峡から回遊する日本海由来の群が含まれると考えられる。函館港に水揚げされた小型いか釣り漁船によるCPUEは前年を下回り、津軽海峡東口周辺海域（41°N以北、143°E以西）における漁場一斉調査でのCPUEも前年を下回った。しかし、前述のとおり、太平洋沿岸を北上する群の来遊量は前年並みと予測されたことから、津軽海峡東口～道南太平洋海域への来遊量は前年並みか下回ると予測される。さらに、日本海で実施された一斉調査結果から、津軽海峡西口周辺海域における来遊量は前年を上回ると予測されたことから、日本海由来の来遊量は前年を上回ると予測される。以上のことから、津軽海峡～道南太平洋海域への来遊量は前年並みと予測される。本予報期間においては日本海由来の来遊量が多いことが見込まれるため、魚体サイズは日本海漁場一斉調査の測定結果から、前年（8月19cm、9月21cm）より大型の個体が主体になると考えられる。

・道東太平洋海域に来遊する漁獲対象資源は、沖合域を北上する群と考えられる。漁場一斉調査における沖合域（143°E以东）でのCPUEは前年を上回ったものの、新規加入量調査における外套背長5cm以上の個体のCPUEは前年を下回った。そのため、道東太平洋海域へのスルメイカの前年並みと予測される。前年は釧路南東沖に形成された暖水塊の影響により、本海域への北上回遊が早まったが、水産総合研究センターの海況予測システム（FRA-ROMS*）によると、本年は道東太平洋海域付近に暖水塊は形成されていないこと、道東沿岸域では親潮が前年より強勢と予測されていることから、釣りによる初水揚げの時期は前年並みであったが、道東沿岸域への主群の北上回遊は前年より遅いと予測される。魚体サイズは、漁場一斉調査の結果から、前年（8月21cm）並みの大きさの個体が主体になると考えられる。

*独立行政法人水産総合研究センターにより開発され、2012年5月より運用を開始した海況予測システム

(2) 調査結果

A：漁場一斉調査

1) 太平洋第1次漁場一斉調査

6月上旬～6月下旬に太平洋で実施された漁場一斉調査（釣り）の結果、調査海域全体の平均 CPUE（いか釣り機1台1時間当たり漁獲尾数）は1.55尾であり、前年（0.22尾）を上回った（図1）。

三陸周辺海域では0.10尾であり、前年（0.08尾）並みであった。津軽海峡～道南太平洋海域では0.01尾であり、前年（0.02尾）を下回った。沖合域では2.30尾であり、前年（0.33尾）を上回り、CPUEが30尾を超える地点は沖合域で北緯39度東経150度付近の沖合域で認められ、この海域に高密度で分布していたと推測される。

漁場一斉調査で漁獲されたスルメイカの外套背長組成は、モードが15cmにある単峰型の組成で、前年（15cm）と同様であった。海域別にみると、三陸周辺海域のモードは16～17cmにあり、前年（15cm）より大型であった（図2）。沖合域のモードは15cmで前年（15cm）と同様であった。津軽海峡海域のモードは15cmで前年（14cm）より大型であった。

2) 日本海漁場一斉調査

6月下旬～7月上旬に日本海で実施された漁場一斉調査の結果、津軽海峡西口周辺海域（39°N～42°N、138°E～140°E）における平均 CPUE は15.9尾であり、前年（9.5尾）を上回った。外套背長組成はモードが19cmにあり、前年（20～22cm）より小型であった。

B：新規加入量調査結果

5月下旬～6月上旬に実施された常磐～三陸周辺海域及び沖合域における新規加入量調査（表中層トロールネット）の結果、外套背長5cm未満のスルメイカの平均漁獲尾数（30分曳網当たり漁獲尾数）は11.1尾で、前年（10.8尾）並みであった。予測期間内に漁場への加入が見込まれる外套背長5cm以上の個体の平均漁獲尾数は1.4尾で、前年（3.6尾）を下回った。分布域の中心は外套背長5cm未満、5cm以上の個体とも東経150度以東の沖合域に形成されており、前年と同様の傾向が見られた（図3）。

新規加入量調査で漁獲されたスルメイカの外套背長組成のモードは1cmにある単峰型で、前年（1～4cm）より小型であった（図4）。

(3) 近年の資源及び漁獲状況

太平洋海域で漁獲されるスルメイカの主体は、冬季発生系群であり、これに秋季発生系群の一部が含まれる。太平洋海域における資源水準を漁獲量の動向から判断すると、1970年～1980年代は低位水準で推移し、1989年から増加に転じ、1996年（年間漁獲量：27万6,000トン）が最も資源水準の高い年となった（図5）。1990年以降は高位から中位水準で推移しており、直近2年の漁獲量は2012年に減少（10万1,000トン）した後、2013年にはやや増加している（11万8,000トン）。

冬季発生系群の主漁場は常磐以北太平洋海域であり、来遊経路から常磐～三陸海域と津軽海峡～道南太平洋

海域、道東太平洋海域に区分される。2013年7月～9月の常磐以北太平洋海域での漁獲量（生鮮）は3万3,800トンであり、常磐～三陸海域では7,900トン、津軽海峡～道南太平洋海域では7,800トン、道東太平洋海域では6,800トン、太平洋のそれ以外の海域では100トンであった（図6）。なお、近年（2009年～2013年）の漁獲量のピークは11月である。

(4) 2014年の各海域の漁況経過（5月～6月）

各地域での漁況経過を表1に示した。2014年5月～6月の太平洋沿岸主要港での水揚げ量（生鮮：速報値、一部未集計）は441トンで、前年（648トン）を下回った。三陸海域南部～常磐海域の5月～6月の主要港での水揚げ量は159トンで前年（51トン）を上回った。三陸海域北部の5月～6月の主要港での水揚げ量は219トンで前年（443トン）を下回った。津軽海峡～道南太平洋海域の水揚げ量は63トンで前年（153トン）を下回った。

表1. 漁況経過（2014年5月～6月、一部未集計・暫定データ含む）

	漁況経過
北海道 道東	釧路港において7月15日に釣りによる初水揚げがあった（前年は釧路港で7月16日）。
北海道 道南	6月における函館港での釣りによる水揚げ量は62トンで、前年比48%であった。CPUEは前年比73%であった。漁場は津軽海峡西口の日本海側であった。
青森	6月の白糠港への釣りによる水揚げ量は1トン（前年比2%）であった。CPUEは前年比16%であった。6月の八戸港と大畑港の釣りによる水揚げはなかった。
岩手	6月の主要7港による水揚げは、底びき網による漁獲が1トン（前年比10%）、定置網による漁獲が56トン（前年比37%）で、釣りによる漁獲はなかった。
宮城	5月～6月の主要10港における水揚げは、底びき網による漁獲が25トン（前年比581%）、定置網による漁獲が109トン（前年比96%）で、釣りによる漁獲はなかった。
福島	沖合底びき網及び小型底びき網漁業による試験操業が実施されており、5月の小型底びき網漁業による若干の水揚げがあった。
茨城	5月～6月の主要港における水揚げは、沖合底びき網による漁獲が5トン（前年比114%）、小型底びき網による漁獲が5トン（前年比103%）であった。
千葉	5月～6月の主要港における水揚げは、定置網による漁獲が5トン（前年比86%）で、6月の釣りによる漁獲は1トンであった（前年はなし）。
神奈川	5月～6月の主要2港における定置網による水揚げ量（7トン）は前年（1トン）を上回った。長井港における釣りによる水揚げは1トンであった（前年はなし）。
静岡	5月～6月の主要港における釣りによる水揚げ量（23トン）は、前年（10トン）を上回り、CPUEは前年比133%であった。
三重	5月～6月の主要港における中型まき網による水揚げ量（107トン）は前年（18トン）を上回った。
和歌山	5月～6月の主要港における釣りによる水揚げ量（5トン）は前年（14トン）を下回り、CPUEは前年比50%であった。

高知	5月～6月の主要3港における釣りによる水揚げ量（0.3トン）は、前年（0.07トン）を上回り、CPUEは前年比136%であった。
----	--

注：CPUEは1日1隻当たり漁獲量

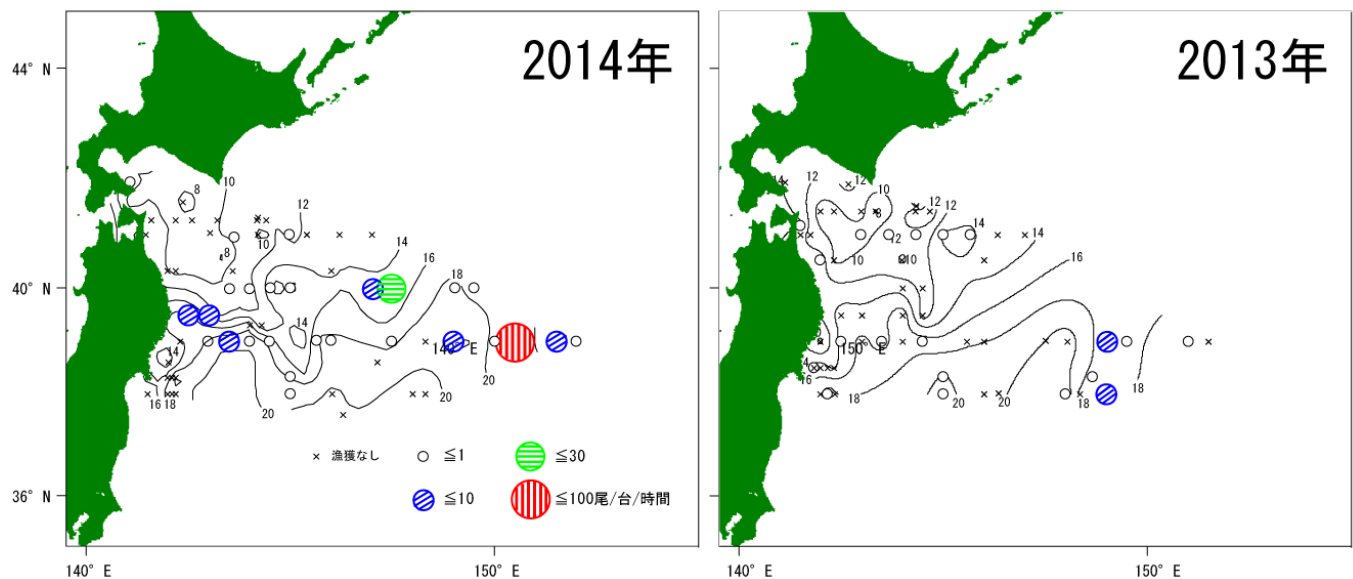


図1. 太平洋第1次漁場一斉調査の結果

2013、2014年6月上旬～6月下旬のいか釣りによるスルメイカのCPUE（いか釣り機1台1時間当たり漁獲尾数）の分布。×は漁獲が無かった点。実線は等温線（海面水温）を示す。

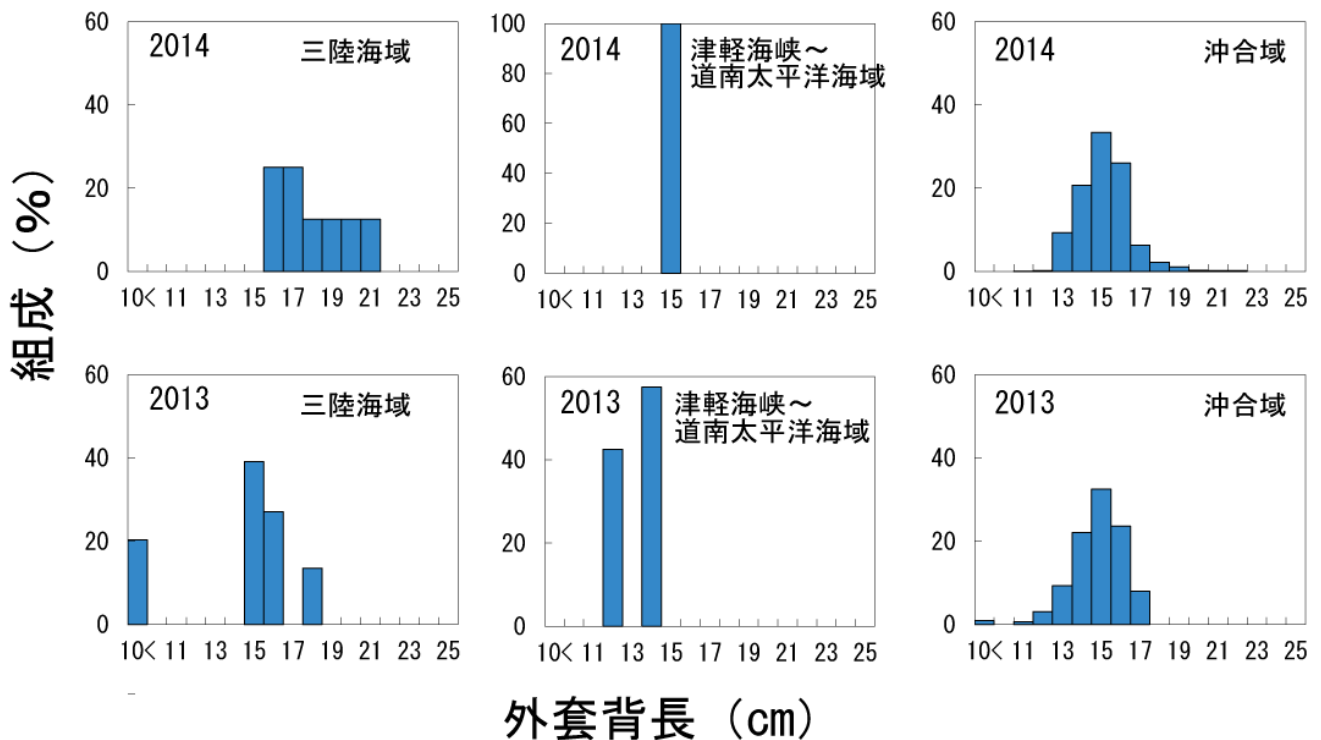


図2. 太平洋第1次漁場一斉調査（三陸周辺海域・津軽海峡～道南太平洋・沖合域）による外套背長組成の結果

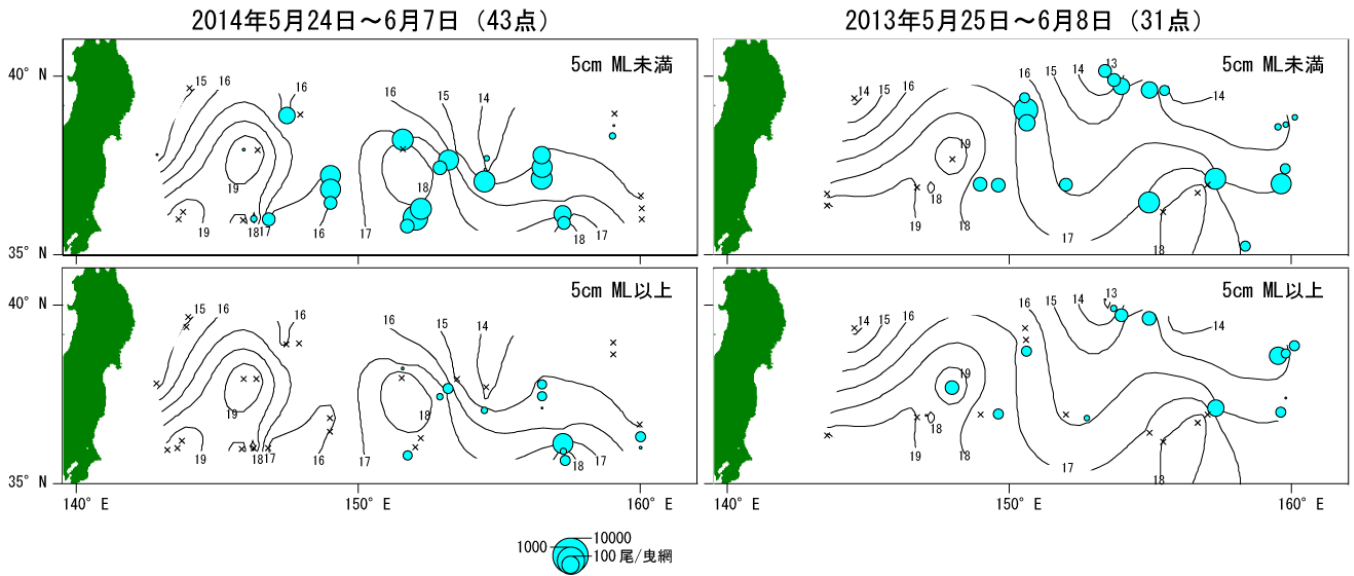


図3. 新規加入量調査の結果

2013、2014年5月下旬～6月上旬の表中層トロールによるスルメイカのCPUE（30分曳網当たり漁獲尾数）の分布。×は漁獲が無かった点。実線は等温線（海面水温）を示す。

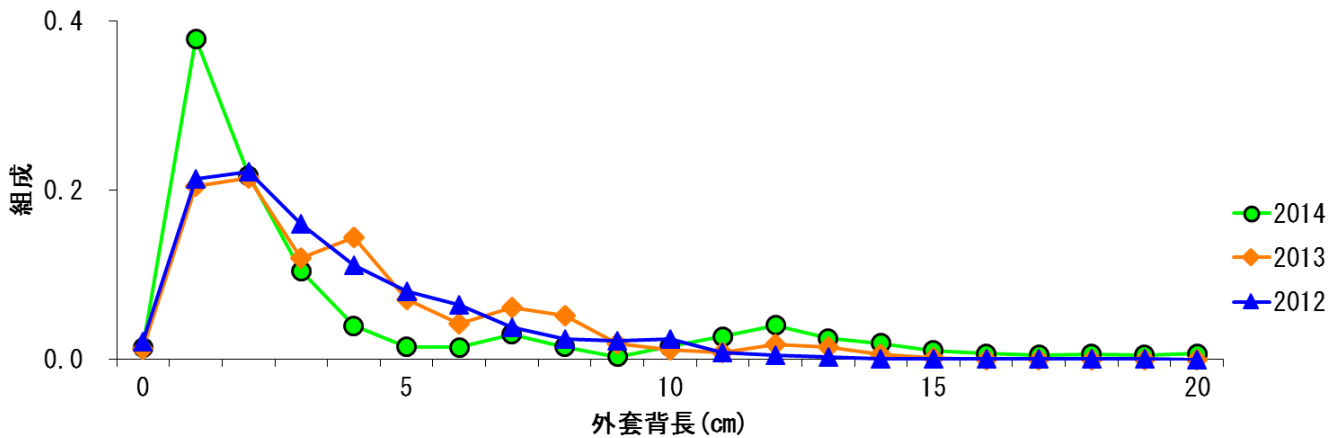


図4. 新規加入量調査による外套背長組成の結果

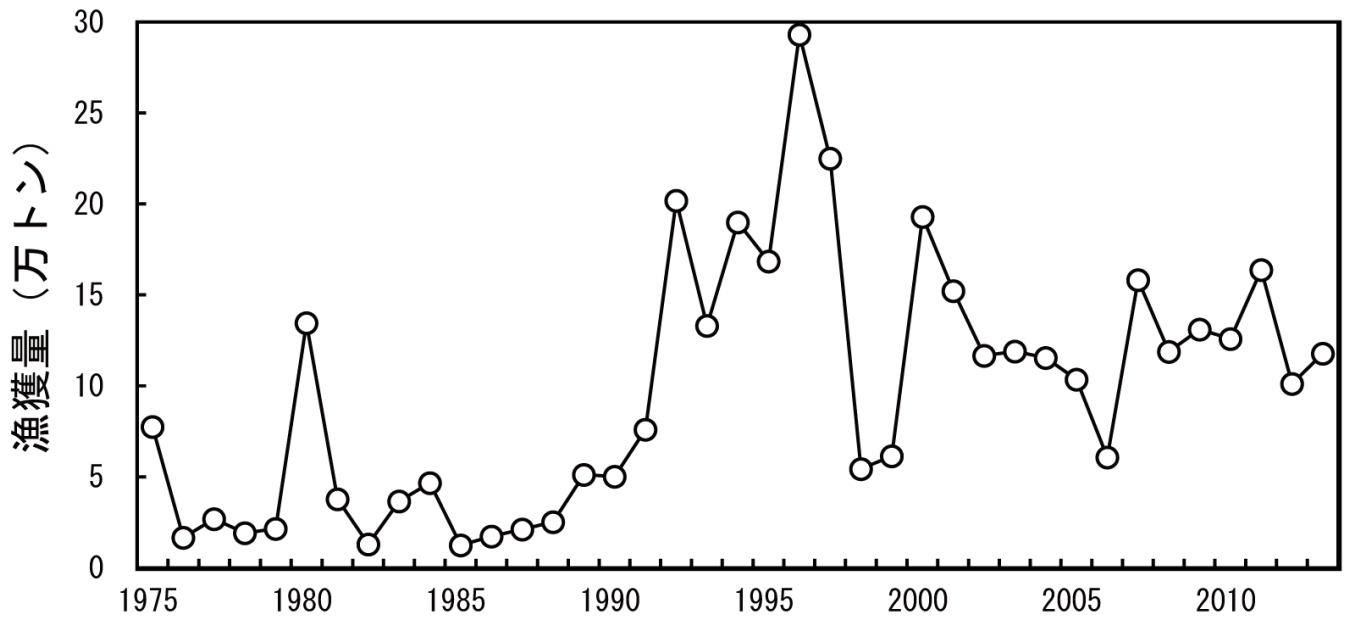


図5. 太平洋におけるスルメイカの年別漁獲量の推移
(集計値は暦年)

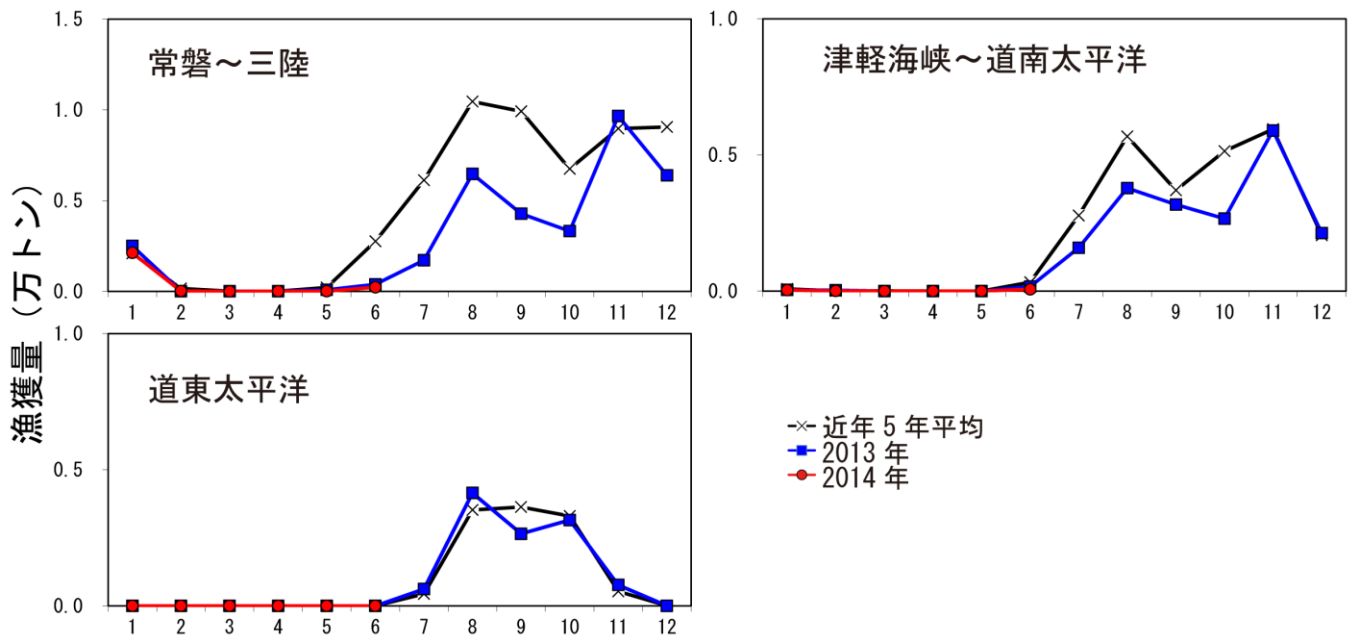


図6. スルメイカの月別海域別漁獲量（生鮮）
近年5年平均は2009年～2013年の平均
(釣り・定置網・底びき網・まき網)

参 画 機 関

地方独立行政法人 北海道立総合研究機構 水産研究本部 釧路水産試験場 函館水産試験場	三重県水産研究所
地方独立行政法人 青森県産業技術センター 水産総合研究所	和歌山県水産試験場
岩手県水産技術センター	高知県水産試験場
宮城県水産技術総合センター	一般社団法人 漁業情報サービスセンター
福島県水産試験場	水産庁 増殖推進部 漁場資源課
茨城県水産試験場	独立行政法人 水産総合研究センター 東北区水産研究所
千葉県水産総合研究センター	日本海区水産研究所
神奈川県水産技術センター	中央水産研究所
静岡県水産技術研究所	(取りまとめ機関) 独立行政法人 水産総合研究センター 北海道区水産研究所